「蝮のすえ」論

――「罪」の問題をめぐって――

清原万里

一

昭和二十年代の武田泰淳は、その作品中で、しばしば「罪」の問題を重要なモチーフとして取り上げている。例えば、実質的に戦後派作家としての出発点となったと考えられる「審判」や、「悪らしきもの」・「誰が」・「夜の虹」といった作品がそれである。そして、おそらくは、昭和二十九年発表の「ひかりごけ」がその頂点となる作品であり、「罪」の問題は、二十年代の武田の創作を文字通り貫いていると言っていいであろう。

それらの作品に描かれる「罪」の問題は、それぞれに異なった描かれ方をしており、時に「罪」の犯しにいたる過程が克明に描かれるかと思えば、「罪」を犯した人間の屈折した心理が中心になることもあり、いかにも武田らしい多彩さを示している。しかし、そこにいくばくかの共通点を見いだすこともまた、不可能ではない。例えば、作品中で「罪」として捉えられるある行為（それは多く、殺人であるが）がなされるまでのプロセスや、あるいは、行為の後、行為者がそれを「罪」として自覚するにいたるプロセス、さらには、「罪」という認識のあり方そのものといった、重要な点で、一貫したものがあるように思われるのである。

これは、武田の文学を論じる場合には、きわめて重要な問題であると考えられる。「司馬遷」の冒頭で前面に押し出される恥辱感の根底に、武田の戦地体験にからむ「罪」の意識を読みとる論者は少なくないし、あるいは、上海で迎えた敗戦によって生まれた「罪」の意識の存在も、指摘できる。つまり、敗戦前後の、出発期の武田の周りには、様々な形での罪悪感がつきまとっており、それが、戦後の、特に昭和二十年代の作品群に大きな影響を与えていることは、否定できない事実であるように思われるのである。

本稿では、以上のような問題意識を前提として、作品「蝮のすえ」を取り上げ、武田の描く「罪」の実体に迫ってみたいと考える。この作品は、昭和二十二年、雑誌「進路」に三回にわたって連載されたもので、戦後に書かれた作品としては、「審判」・「秘密」についで、三作目にあたり、方法やテーマの点で、前二作を継承していると考えられる作品である。武田が戦後派作家として認められたのも本作によ

ってであり、その意味では、戦後の出発期の武田を知る上では、きわめて重要な作品だということができるし、殺人が重要なモチーフとして取り上げられていることから、戦後初期の武田の作品における「罪」の問題を考えるには、欠かすことのできないものである。おそらく、そこに描かれた「罪」の問題は、他の作品を解明するための手がかりをも与えてくれるに違いない。

二

「蝮のすえ」における「罪」の問題を考える場合に、中心となるのは、いうまでもなく、辛島殺害である。作品の大部分は、主人公の〈私〉（杉）が辛島を殺害するにいたる過程が描かれており、全体としては、〈私〉が、辛島殺害を軸にしながら、いかに変化していくかということが中心として描かれている。

いま、私は、「蝮のすえ」を論じるにあたって、作品を、辛島殺害をターニングポイントとして、大きく二つに分け、辛島殺害にいたる過程を「罪」の犯しにいたる過程、辛島殺害以後を「罪」の自覚にいたる過程として、それぞれの過程を追ってみることにする。

作品冒頭の〈私〉は、よく知られているように、一種の自我崩壊の状態にある。

「生きて行くことは案外むずかしくないのかも知れない」

私は物干場のコンクリートの上に枕を置き、それに腰をすえて陽にあたっていた。陽の光の射さぬ裏部屋を出て、毎朝そこで日光浴をした。――（中略）――

「ともかく、みんなこうして生きている以上は」私は会元里の家々の屋根の向うに、白々と迫った映画館の壁を視力の弱った眼で見つづけていた。壁はギラギラ光り、冬の青空の中に浮び出ていた。「戦争で敗けようが、国がなくなろうが、生きていけることはたしかだな」

日本人商店のショーウィンドーも、いつか晴天白日旗や蔣主席夫婦の写真を飾り始めた。

――（中略）――。私は無表情のときも苦笑するときもあった。どんな時でも、死なないで生きていられると、そればかり感じた。最初は恥を忍んで生きている気でいた。だがフト気づくと、恥も何もないのであった。私の無表情や私の苦笑は、恥も何もなく、ただ生きているだけの一枚看板であった。

ここでの〈私〉は、敗戦を経験することによって、人間らしい、感情的な反応を喪失してしまっている。敗戦国の国民が、戦勝国の都市で生活している以上、生きていくのは、むずかしいどころの騒ぎではないはずである。事実、代書業を営む〈私〉のもとへは、次々と客が訪れ、悩みを持ち込んでくる。それは、あるときには、命がけの悩みであり、そうした人々に接していれば、生きていくことが、決して易しくはないことが感じとれるはずである。にもかかわらず、〈「生きていくことは案外むずかしくないのかも知れない」〉と漏らす〈私〉の言葉からは、二重の意味を読みとることができよう。

一つには、〈どんな時でも、死なないで生きていられる〉という〈私〉の言葉が示すように、〈私〉が生きていく上での実感が込められているだろう。敗戦によって、これまで信頼してきたものをすべて

失い、生きていく拠り所をなくして、なお、〈私〉は生きているのであり、そこから、このような実感が出て来るのは、うなずけることである。

しかし、実感といっても、冒頭の言葉が、すべてを失ったものの逆説的なつぶやきであるかといえば、決してそうではないだろう。〈私〉は、生活のために代書業を営んでおり、仕事は結構繁盛している。そのことからくるおごりも、この言葉には含まれているのではないだろうか。引用に続く部分で、〈私〉は代書業について述べ、自分の無責任な仕事ぶりについて語った後で、次のような感想を漏らしている。

私は金さえもらえばよかった。居留民の利益のためとは露ほども考えない。そんな私を頼りにする人々をあわれと感じた。これほど無責任、無能力な男が役に立つ人の世が馬鹿々々しかった。

あまりにチャチで、あっけなかった。

つまるところ、〈私〉は、自分のいい加減な代書業が、人に信頼され、人の役に立ち、それで自分が生活していけることに対する驚きを感じとると同時に、〈あまりにチャチで、あっけな〉いと、たかをくくってしまっているのである。もちろん、ここでの言葉はそんなに単純ではないのであって、そこには、世間がそれ程まで〈チャチ〉であることに対する絶望が潜んでいそうにも思われる。しかし、一方で、たしかに〈私〉にはある種の傲慢さが感じられるのである。

いずれにせよ、〈私〉は、敗戦に傷つき、あるいは傲慢になって、正常な感情を失っている。素朴に考えて、このような人間が、殺人を犯すことは不可能である。人を殺すからには、そこにはかなり烈しい怒りなり、恨みなりが存在しているはずであり、また、それなりの決意が必要なのであって、〈私〉のように〈恥も何もない〉人間は、殺人の動機をもつことすら困難であろう。とすれば、辛島殺害が、動機なき殺人ではない以上、〈私〉が辛島を殺すに至るには、それなりの変化が〈私〉に起っていなくてはならない。少なくとも、殺人を行うだけの感情の動きを回復していることが必要である。そして、本稿の問題意識からいえば、その変化の過程こそ、「罪」の犯しにいたる過程であるということになるだろう。

結論をさきに言えば、〈私〉が辛島を殺すに至るには、大きくは二つの要因が存在していると言えよう。一つは、〈彼女〉との関係であり、もう一つは、〈私〉の、強者への変身願望とでも言うべき情念である。まずは、第一の点から検討してみたい。

〈彼女〉は代書の依頼人として〈私〉のもとを訪れたのであるが、夫の〈病人〉ともども、かつて〈私〉が書いていた詩の読者であり、初めから〈私〉に一方的な親近感を抱いていたことをきっかけとして、〈私〉を関係の中に引きずり込んでしまう。

「え？」私は全身の血が逆流して来るような屈辱を感じた。代書の料金を受領しようとする私に向って、よりによって昔の詩、あの甘ったるい詩のことなど、何故この女は言い出すのだ。よくおうわさしています。何というたまらないことだ。

これは、〈彼女〉が〈私〉の詩の読者であったことを告げたときの、〈私〉の反応である。ここで〈私〉が、〈全身の血が逆流して来るような屈辱〉を感じるのは、すでに述べたようにこのときの〈私〉が、〈「生きて行くのは案外むずかしくないのかも知れない」〉という状態に置かれていたことに起因している。二度目に〈彼女〉が訪ねてきた

ときも〈私〉は「被銃殺者」なる詩を書いているのであるが、ドイツの戦犯が銃殺される場面について、〈「えーと。上半身が前へ倒れた！と。何故倒れたのでしょうか、と。引力の法則によってか、と」〉といった言い方をする内容の詩であり、そこには、このときの〈私〉のもっている無責任さ、傍観性が色濃くあらわれている。しかも、〈私〉は、その無感動の中に、傲慢ともいえる態度で居直っており、〈そんな私を頼りにする人々をあわれと感じた〉という高みに自分を置いている。それに対して、〈彼女〉が愛読していると語った〈私〉の昔の詩は、〈甘ったるい〉という〈私〉の言葉からみて、おそらくは感情を前面に出したものであったと推定でき、従って、ある意味で感情を軽蔑している現在の〈私〉には、〈彼女〉の言葉が〈屈辱〉と受け取られるのであろう。

しかし、実の所、〈屈辱〉を感じた時点で、〈私〉は、すでに〈彼女〉によって、その立脚点を崩されている。冒頭の〈私〉は自分のことを〈恥も何もない〉と語っており、その〈私〉が〈屈辱〉を感じること自体が、すでに矛盾を露呈している。つまり、〈彼女〉は、初めから、〈私〉を無感動の中から引きずり出し、関係の中へ連れ込む存在として登場しているのである。そのことは、例えば、〈彼女〉が初めて訪れたときの、〈かつて自分が人生の目的を失わぬ頃抱いていた幻が突如出現したかの如くであった。〉という〈私〉の感想にもあらわれている。〈人生の目的を失わぬ頃〉というのは、言い直せば、〈私〉が〈甘ったるい詩〉を書いていた頃であり、無感動な傍観者としてではなく感情をもった人間として生きていた頃なのである。

このように、〈私〉と〈彼女〉との出会いは、すでにその初めから、〈彼女〉によって〈私〉が関係の中に引き込まれ、感情を回復するという作品のプロットを方向づけている。一度〈屈辱〉を感じたことで、〈私〉が〈彼女〉をめぐる人間関係に足を踏み入れることは約束されたのであり、〈私〉は次第に抜き差しならない局面へと足を踏みいれることになるのである。その関係とは、辛島を抜きにしては語れないものであって、その中に一度足を踏み入れてしまえば、必然的に辛島と対決せざるを得なくなる、という性質のものであった。〈私〉と〈彼女〉の関係が、決定的になるのは、〈私〉が、始めて〈病人〉を訪問した日のことである。

「杉さん」彼女は自分の家の入口で別れた時と同じ眼つきをした。

「あなた、わたしを守ってくれる？　愛してくれる？　わたしは、あなたを愛してるのよ」

「僕が君を？」私は歓喜の念を湧き上がらせながらも、返事をごまかしたかった。私にとってはすべてが耳新しかった。それにひきかえ、彼女はすっかり用意しているらしく見えた。

「わたし、ほんとに今、生きるか死ぬかの場合よ。それはわかるでしょう。ね、だから真剣よ。ごまかさないで、愛してるなら愛してると言って頂戴。いいかげんじゃすまされないのよ。だってわたし本気で好きなんだもの」

「好きだよ。もちろん君が好きだよ。だけどたぶん、守れないよ。守ることはたぶんだめだよ」

〈彼女〉は、〈私〉のところへ来る前に、辛島に出会っており、その興奮がこの時点でも持続している。ここで〈彼女〉が〈守ってくれる？〉と尋ねているのはそのためであるが、きっかけはなんであれ、

〈彼女〉が〈私〉に愛を語ったのは事実である。そして、〈私〉は、〈守れないよ〉と予防線をはりながらも、ひとまずは〈好きだよ〉と答えてしまっている。もし、この言葉を貫こうとするなら、〈私〉は、必然的に、辛島と対決せざるを得ない。辛島は、〈私〉と〈彼女〉の関係に気づいており、〈私〉が辛島を避けたとしても、いずれは辛島の方が、〈私〉に対決を迫って来るはずだからである。

このように、〈私〉は、〈彼女〉との関係に足を踏み入れることで、辛島と対決せざるを得なくなるのであるが、それにしても、〈守れないよ〉と予防線を張り、〈愛してる〉と言うかわりに〈好きだよ〉と一歩引いたような発言を繰り返す〈私〉が、そのまま辛島殺害へと向かうというのは、いささか説得力に欠けてはいないだろうか。実際の殺害の場面では、対決は辛島から強要されたのではなく、〈私〉が、斧を隠し持って、辛島と〈彼女〉が会うはずの場所へあらわれているが、そのような積極さがにわかにあらわれてきたとは考えにくい。〈彼女〉と辛島が会えば、辛島が〈彼女〉を拉致することは目に見えており、〈彼女〉を守る必要から、行動に出ざるを得なくなったと言うことはできる。しかし、それならば、〈彼女〉のそばに付き添って、辛島に近づけないようにすることも可能なのである。それが、外套に斧を隠し持ち、〈足の骨がゴキゴキ言うほど走〉り、有無を言わさずに辛島に切りかかるほどのエネルギーを生み出すのはなぜだろうか。

私は、そこに、辛島殺害にいたるもう一つの要因、強者への変身願望を読みとりたいのである。

「蝮のすえ」では、〈私〉が、いわゆる青白きインテリであり、「強さ」とは縁のない人物であることが繰り返し語られている。それは、例えば盲頭の、生き延びるための卑屈とさえ言える態度にもあらわれているが、以後も、ことあるごとに強調されている。

その朝、私の前を、三十歳ほどのガッシリした日本人が歩いていた。肩を張り、足をふみしめるようにして行く全身に力がこもっていた。背広姿だが、もと軍人と思われた。彼はわざと悠々と帽子もとらず衛兵の前を通過した。そして荒々しく咳払いして唾を吐いた。そして歩み去った。背の低い衛兵は声をかけそうにした。しかし止めた。その後を私が通過した。私は無帽だった。あたりに通行人はいない。しかし私は頭を下げなかった。衛兵は怒鳴り、私を呼びとめた。私は往来を渡り彼の前に行った。「何故、礼をしないか。そこに立っていろ！」と彼は言った。背が低く若い衛兵は声もおそろしげでなかった。善良な青年と思われた。私は直立不動の姿勢をとり、上海語で「まことにすみません」と言った。

ここで、衛兵が、前を行く軍人風の男には声をかけず、〈私〉には声をかけた理由は明白である。〈私〉は、明らかに、人を圧倒し、黙らせるだけの力強さを欠いている。軍人のもつ威圧感を〈私〉はもてないのである。しかも、衛兵が、挑発的な態度をとった男を見逃しながら、〈私〉をとがめたとき、抗議をするだけの力も〈私〉は持ち合わせておらず、〈まことにすみません〉と謝るほかないのである。つまり、〈私〉は、現実の暴力的な力には全く抗し得ない弱者として描かれているのである。そして、そのことをあからさまに〈私〉に指摘したのは辛島であった。

辛島は、典型的な強者として〈私〉の前に現れる。彼は、〈私〉に向かって、次のように言い放つ。

「インテリーは社会の良心だ。そうだな、杉君。イヤがってもそれは責任だ。だが君らは社会の腕にも脚にも、胃にも腸にもなれやせん。せいぜいのところ神経だ。小うるさい、役にも立たぬ神経だ。しかも妙てけれんな一人種の末梢神経だ。騒いでもだめさ。世界も、俺たちも痛痒を感じんよ。俺たちは、まあ大げさに言えば心臓さ。とまりたい時はとまる。自分でとまる。君らにはとまることさえできないんだからな」

〈私〉は、こう語る辛島の口調に切迫したものを感じ、〈彼は自分の一生の終りに来ているらしかった〉と判断している。おそらくその判断は正当なのだろうが、それにしても、〈一生の終り〉に至ってなお、このような強者の論理をふりかざすことでしか、自己を確認できない辛島は、強者として生まれてきた人物だと言ってよいだろう。そして、辛島の弱みに気づきながら、〈理くつがダメなことはいかなる世にもかわりない。〉と考えて、辛島に反論しない〈私〉は、やはり弱者の位置に立っていると言ってよいのではないか。〈理くつがダメ〉だと考えたとき、反論の方策を失うということは、〈私〉が、〈理くつ〉でしか存在を主張できないことを示している。〈私〉は、肉体的に、あるいは暴力で辛島に勝つことはできないのである。

このように、辛島の前では、少なくとも肉体的には弱者の立場に置かれている〈私〉は、しかし、それに満足しているわけではない。〈私〉のうちには、自分が肉体的な強者たらんと欲する、暴力的な衝動が潜んでいると考えられる。

私は両手を頭上に挙げた。するとアスファルトの上に、自分の影が、ゴリラが歩き出したように落ちていた。私はわざと膝を曲げ、頭上の両手をゆらゆらさせ、ゴリラのようにして深夜の裏街を歩いた。

――（中略）――

その影の重なり合った闇の中を、私はあたかも森林を出て、血潮したたらんとする現場に急ぐ膂力すぐれた怪獣のように、一歩々々ふみしめながら歩いた。すると私以外の生物、神経以外の力で充実したあるすばらしい四足動物であるかの如き自信にあふれて来るのであった。頭を下げる、規則を守る、それら市民的用心は、もはや消え失せていた。

ここに見られる行動は、〈私〉の暴力的な衝動を示していると見てよいであろう。〈私〉が〈怪獣〉と化すとき、その獲物となるのは、おそらく辛島である。酒に酔った〈私〉は、自分が〈神経〉などではなく、辛島よりも強大な力をもった〈怪獣〉となって、強者辛島を圧倒し、自分が強者の立場に立つことを夢みているのではないだろうか。そして、それは、決してその場だけのものではなく、〈私〉の中には、常にそのような衝動が存在していたのではないかと考えられる。そして、このような強者への変身願望が、〈彼女〉との関係に絡まって、〈私〉を辛島殺害へと押しやったと見ることができよう。

実のところ、このような強者への変身願望は、武田の作品において、しばしば見られるものである。特に、「蝮のすえ」の四ケ月前に発表された「審判」では、そのような願望が、殺人の、われわれが確定できる唯一の動機として描かれている。「審判」の二郎は、戦場で二つの殺人を犯すのだが、そのうち、二回目の、老人を射殺する場面で、二郎はその心情を次のように述べている。

私は立ち射ちの姿勢をとりました。老夫の方の頭をねらいました。

二人は声一つたてません。身動きもしません。ひきがねの冷たさが指にふれました。私はこれを引きしぼるかどうかが、私の心のはずみ一つにかかっていることを知りました。止めてしまえば何事も起らないのです。ひきがねを引けば私はもとの私でなくなるのです。その間に、無理をするという決意が働くだけ、それできまるのです。もとの私でなくなってみること、それが私を誘いました。発射すると老夫はピクリと首を動かし、すぐ頭をガクリと垂れました。

二郎は、老人とは何のつながりもなく、積極的に射殺しなくてはならない理由をもっているわけでもない。彼が、最終的に老人を殺すことを決意するのは、〈もとの私でなくなってみること〉の誘惑によってである。つまり、ここでの二郎は、「蝮のすえ」の〈私〉のように、変身願望をもっているのである。しかも、二郎は、〈もとの私〉を次のように捉えている。

私は自分がどうもただの市民くさくて、兵士らしくないのを恥じたこともあります。ことさらに荒々しく敵を殺せる男であるように努めました。勇敢、犠牲、献身、無我その他いろいろ青年の心をさそう美徳を自分の身につけること、それは死をおそれず敵を殺すことであるように思われました。

ここで、〈荒々しく敵を殺せる男〉たらんとし、〈兵士らしくない〉自分を〈恥じ〉ている二郎は、〈母のてで育てられ、高等教育を受けた〉人間であり、その位置は、「蝮のすえ」の〈私〉に非常に似かよっているとは言えないだろうか。もちろん、二郎が殺人を犯した理由はそれほど単純なものではあるまい。しかし、少なくとも、作品中で語られた心理をつなぎ合わせると、〈兵士らしくない〉自分を〈恥じ〉る二郎が、〈もとの私〉でなくなってみたいという誘惑からひきがねをひいてしまったという図式は読み取れるし、それはさほど見当外れのものではないだろう。

さて、以上、〈私〉が辛島殺害にいたるまでの過程を、〈彼女〉との関係と、強者への変身願望という二つの側面から見てみたが、それでは、辛島を殺した後の〈私〉の心理はどうなっているのだろうか。続いて、辛島殺害以後の〈私〉を見てみたい。

三

具体的に、辛島殺害後の〈私〉について見る前に、辛島殺害そのものについて、一言ふれておきたい。

厳密に言えば、〈私〉は辛島を殺してはいない。〈私〉が斧で辛島に切りかかったとき、辛島はすでに何者かによって（後にそれが〈彼女〉の雇った暗殺者であることが判明するが）背中をさされ、致命傷を負っており、結果的に、〈私〉は、まもなく死ぬ無抵抗な人間に斧で切りつけることになったのである。

とはいえ、〈私〉が、辛島の肉体に斧を打ち込み、辛島の血を浴びたことは事実であって、〈私〉はその事実から逃れることはできない。問題は、〈私〉が、辛島を殺したかどうかということではなく、〈私〉が事実をどのように受けとめたのかということであろう。

行為の直後の〈私〉は、〈自分が辛島殺害に何の関係もない人間であることを証拠だてるように行動して〉いる。つまり、自分が行った

ことの意味を振り返るより、社会的に自分が犯罪者として追求されるのではないかという恐れに、〈私〉は支配されているのである。それが、一夜あけて、〈彼女〉に会うときには、〈私〉は〈自分の経験の重さ暗さにうちひしがれ〉ている。〈私〉は、〈彼女〉と接吻しながら、次のように考える。

「もう安心ね。もうこれでいいわね」彼女は楽しげな、うっとりした顔をしていた。しかし私はなお自分の手が血で汚れ、自分の耳に辛島のうめきを聴いているかの如く、重苦しく、不安だった。彼女の唇も私を甘い想いにはさせなかった。私は万事が醜く、無意義に思われ、口をきくのもイヤであった。

この引用を読めばわかるが、〈私〉は、辛島殺害を、「罪」といった形で捉えてはいない。言い換えれば、抽象的な捉え方はしておらず、辛島のうめき声や、血の感触といった具体的なイメージで捉えている。これはほかの箇所でも言えることであって、例えば、いよいよ帰国がきまった〈私〉は、〈私が斧を手にして彼におそいかかったこと、首すじ深く切下げたこと、死につつある彼の瞳の色を眺め、最後のうめきを聴いたこと、その記憶だけが、私を支配していた。〉と述べている。つまり、〈私〉は、自分の行為について、ついに、「罪」といった抽象的な捉え方をせず、あくまでも、辛島の具体的イメージでしか、行ったことを振り返らないのである。もう少し言葉をかえるならば、〈私〉は、自分の犯した「罪」を、常に被害者である辛島との関係の中で捉えていると言うことができる。そのことが最も端的にあらわれているのは、次の部分である。

「あなたは、見ていて、あいつの心の中がわかりました、か。僕には、わかります。すっかり、わかりますよ。死にかかって、あいつが考えていた、ことが」痛々しく落ちこんだ彼の両眼は、そのとき、薄いまぶたの下で細く光ったように思われた。

「自分が死んで、あなたが平気で生きていることは、何という妙なことだろう、とそう思っていたでしょうよ」彼は首を動かそうとした。持ち上げようとしたのかもしれない。だが、できなかった。

「僕も、今、そう思っている、ところですよ」――（中略）――

彼女は病人が私を憎みはじめたと言う。それは私を驚かさなかった。それよりも、病人が、自分で今考えていることは、辛島が死なんとして考えたことと同一だという確信を得たこと、そのことの方が私を圧しつぶそうとしていた。――（中略）――。だが病人は明らかに辛島に近づき、辛島の側に入りつつあった。死者の側へ入って、私たちをおびやかしはじめたかの如くであった。

ここで、〈病人〉が辛島と同じ認識に達したというのは、いささか奇妙なことではある。そして、〈私〉が、〈病人〉が〈私〉を憎むことより、辛島と同じ認識に達したことに圧迫を感じているというのも、素直には理解しがたいことであろう。ここでの〈私〉の心理はどうなっているのだろうか。

〈私〉の辛島に対する立場と、〈病人〉に対する立場との共通点を考えてみると、それは、ただ一つ、〈私〉が生き残った者であり、彼らに対しては、一度は強者の立場に立ったということであろう。辛島に対しては、〈私〉は本来弱者の立場にあったのだが、辛島殺害の場面で、すでに致命傷を負い、抵抗する力をもたなかった辛島に斧を打

ち込んだとき、〈私〉は、辛島に対して絶対的な強者の位置に立っている。〈私〉が生き残り、辛島が死んだという事実が、そのことを雄弁に物語っているのである。〈病人〉の場合には、〈私〉は、直接危害を加えたりはしていない。しかし、辛島殺害の報をきいた〈病人〉が、〈私〉に向って、熱っぽく語りかけたとき、〈私〉が〈病人〉に対して、強者の位置に立っていることがはっきりしたのではないだろうか。少なくとも、〈彼女〉をめぐっての人間関係の中で、唯一生き残った人物であり、〈彼女〉の愛をかち取った〈私〉は、ほかの二人に対しては、勝利者であるに違いない。〈病人〉は、〈私〉のしたように、斧をもって、辛島のもとへ走ることさえできず、床についたままで、死んでいかねばならないのである。

おそらく、生きているということは、こういうことなのだろう。〈私〉が置かれた状況では、生こそが勝利であり、死は敗北であるのかもしれない。だからこそ、同じように死んでいこうとしているとき、〈病人〉は、辛島と同じ認識に達したのであり、その認識は、死者の側からの、生きているものへのおびやかしの声となって、〈私〉の耳に届くのではないだろうか。

ここで、私が問題にしたいのは、〈私〉が、そのような死者からのおびやかしの声を敏感に聞き取り、それにおびえているということである。そして、ここでの〈私〉は、それを自分の「罪」だとか、ましてや原罪だとかいう形で認識してはいない。ただ、おびやかしの声を感じとり、それに感覚的におびえているだけなのである。換言すれば、〈私〉にとっての「罪」とは、〈私〉が殺害した、あるいは〈私〉を強者として見上げることになった死者たちによるおびやかしの声であり、それ以外の抽象的な認識ではありえないのではないだろうか。そして、「罪」がそのような形で感受されるとき、〈私〉は、作品冒頭の言葉とは正反対の、次のような言葉を漏らすことになるのである。

私は盛りあがる海の傾斜に見入ったまま首を横に振った。「ただ苦しいんだよ」

「わたしをまだ愛してるの、え？」

「重苦しくて、ほかのこと考えられないんだ」

「何がそんなに苦しいの」船腹が鈍く鳴り、冷たいしぶきが、手や顔にかかった。「辛島のことなの、わたしの夫のことなの？」

「全体だよ。自分が生きていることの全体だよ」

さきに引用した、辛島殺害の翌日の場面で、〈私〉は、〈しかし私はなお自分の手が血で汚れ、自分の耳に辛島のうめきを聴いているかの如く、重苦しく、不安だった〉と述べているが、そこでの〈重苦しさ〉と、ここでの〈重苦しさ〉はおそらく等質のものであろう。そして、〈重苦しい〉という言葉は、言うまでもなく、〈病人〉の言葉を聞いたときに感じたおびえとも響きあっている。もちろん、〈生きていることの全体〉が〈重苦しい〉のである以上、それは、ある程度普遍的な認識と言っていい。しかし、〈「重苦しくて、ほかのこと考えられないんだ」〉という言葉を、辛島殺害の翌日〈病人〉を訪ねた後の、〈ただ私が関係した辛島の死の事件だけが、私の脳の真中に場所を占めていた。〉という言葉と突き合わせてみると、ここでの〈重苦しさ〉が直接に辛島殺害に結びついていることが推定できる。〈生きていることの全体〉が〈重苦しい〉のは、単に辛島や〈病人〉だけの問題にとどまらず、自分の生の全体に、死者たちの声が、ぬぐい去りがたく

刻印されているからであり、その声の重みを〈私〉は直接に感じとっているのではないだろうか。

いささか論が飛躍したが、この問題に、傍証がないわけではない。例えば、「審判」の二郎は、殺人という行為そのものについては、ほとんど罪悪感を抱いていない。つまり、「罪」という認識をもっていない。彼が、自己の行為を「罪」として自覚するきっかけとなったのは、自分が殺した老人の立場に自分をおいてみたことであった。そして、彼は、「罪」の自覚を守るために、中国に残る決心をする。

日本へ帰り、また昔ながらの毎日を送りむかえしていれば、再び私は自分の自覚を失ってしまうでしょう。海一つの距離ばかりではありません。自覚をなくさせる日常生活がそこに待ち受けているからです。私は自分の犯罪の場所にとどまり、私の殺した老人の同胞の顔を見ながら暮したい。それはともすれば鈍りがちな自覚を時々刻々めざますに役立つでしょうから。

これは、二郎が中国に残る理由を説明した部分である。ここでわかるように、彼の「罪」の自覚は、自分が殺した老人の同胞の顔を見ることによってのみ、持続させることができる性質のものである。もちろん、ここでは、「蝮のすえ」と違って、二郎は自分の行為を「罪」として認識している。しかし、それは、あくまでも死者へ向けての意識であって、神に向けての、絶対的な「罪」の自覚ではない。〈私の殺した老人の同胞の顔を見ながら暮〉らすというのは、おそらく、死者を思い返すことの代償行為であり、死者だけが、二郎の「罪」の意識の対象となっている。

同じことは、「ひかりごけ」の船長にもいえるだろう。

検事　裁判長、かまいません。被告に喋らせて下さい。お前は本官に裁かれたくないのか。何故、本官ではいけないのか。誰ならいいのか。誰なら不服を言わないのか

船長　五助か八蔵か西川なら。それとも……。

引用を見ればわかるように、船長は、自分の「罪」を裁けるのは、自分が食べてしまったものたちだけであると考えている。つまり、ここでも、彼の「罪」の意識は、絶対的なものに向けられてはおらず、さらにいえば、倫理や法律に向けられてもいない。ただ、自分が食べてしまった者たちに対してのみ向けられているのである。

このように、武田の作品において、「罪」はしばしば、犠牲となった者との関係の中で具体的に捉えられ、一般化されないという傾向をもっているのである。とすれば、「蝮のすえ」の「罪」の意識が、死者のおびやかしの声に対するおびえ、〈重苦しさ〉として捉えられていると見るのも、あながち間違ってはいないのではないだろうか。

四

以上、「蝮のすえ」における、「罪」の犯しと、「罪」の認識に関する問題を見てきたわけであるが、ここに見られた「罪」の特徴は、「罪」の意識の根底にある「行為」の独自性という視点から見たとき、より明確に捉えられるように思う。

「蝮のすえ」における「行為」とは、言うまでもなく辛島殺しであるが、それは、近代の、特に戦後の作家が描く行為とは、かなり異なっているのではないだろうか。これは、あくまでも私の独断だが、一般

に「行為」というものが文学に描かれる場合には、「認識」と対置されることが多いように思われる。例えば、自己を認識者として位置づけながら、その対極にある「行為」というものの意味を探ったり、あるいは「行為」へのあこがれを語るという形での「行為」の捉え方が存在している。しかし、武田が「蝮のすえ」で描いた「行為」はそれとはかなり異なっている。具体的に言えば、〈私〉が辛島を殺すという「行為」に、形而上学的な意味が付随していないのである。

さきに見たように、〈私〉は、半ばは〈彼女〉を中心とした人間関係に押しやられ、半ばは自分の変身願望につき動かされる形で「行為」にいたるわけだが、このような「行為」への過程は、通俗的と言ってもよいものであって、〈私〉は、「行為」を行うために、形而上学的な思考を展開したりはしないのである。たしかに、変身願望というものは存在しているし、〈私〉が「認識」的な人物であることも間違いないが、それにしても、「認識」者たる自分が、「行為」者への変身を夢みるといった図式とはいささか異なったところに、〈私〉の「行為」はある。〈私〉の変身願望は、怪獣の真似をする場面でわかるように、半ば暴力的な衝動であり、どちらかといえば、潜在的に〈私〉の中に「行為」者としての自己が潜んでいるといった趣がある。武田の作品の主人公は、しばしば、酒に酔って、人が変わったように無茶な行為を繰り返すが、そのような、酒が入って理性が抑制されたときに吹き出す暴力的な衝動と、〈私〉の変身願望は同じものであると言ってよいように思われる。しかも、〈私〉はもちろん、作者も、そのような願望の性質を突き詰めて考えたりはしないのである。つまり、〈私〉の「行為」は、「認識」と対置されるようなレベルにはなく、むしろ、「感情」のレベルにとどまっているのである。そのことは、〈彼女〉との関係が、「感情」を喪失していた〈私〉が怒りを覚えることをきっかけとしてはじまり、〈好きだよ〉という「感情」の表白で決定的になる、その過程にも表われているように思われる。また、〈私〉が辛島に斧を打ち込んだとき、すでに辛島が致命傷を負っていたという事実は、〈私〉の「行為」が、〈彼女〉を守るといった意味さえ失っていることを示してはいないだろうか。つまり、あらゆる形而上学的な意味をはぎ取られた「行為」そのものとして、〈私〉の「行為」は描かれているのである。

〈私〉の「罪」の認識のあり方も、そのような「行為」の性質に関係しているように思われる。「行為」というものが「認識」のレベルで捉えられていれば、その「行為」の結果も、「認識」のレベルでの考察の対象とならざるを得ない。しかし、「蝮のすえ」のような「行為」のあり方は、結果として、「感情」レベルの反応をよびおこすことになるのではないだろうか。つまり、〈私〉の「罪」の意識は、「行為」の直接的な感触として〈私〉の中に根を張り、「してしまった」といった感覚として表現するほかないようなものとなるのである。このように、〈私〉が、自己の「罪」を死者からのおびやかしの声として感じ、最終的に〈重苦しい〉という感覚として「罪」を捉えたのは、辛島殺しという「行為」の性質にもよっていると考えられるのである。

このような「罪」のあり方を、抽象化がなされていず、従って、普遍性をもたないとマイナスに評価することも可能である。しかし、見方を変えれば、「蝮のすえ」は、「罪」を安易に抽象化することなく、人間の実存のレベルで捉えたと評価することも可能だろう。少なくと

も、「罪」が形而上学のレベルで捉えられない以上、普遍的な問題意識への「罪」の解消といったことは起らないし、救いや許しも訪れない。つまるところ、〈私〉は、自己の「罪」を、〈重苦しさ〉として抱え込まざるを得ないのであって、そこから逃げ出す道は、忘れること以外にはない。従って、「罪」は持続的に〈私〉につきまとい、〈私〉を苦しめることになると予想できるのである。このような、「罪」の抱え込み方は、抱え込む側に大変な重荷を背負わせることになり、従って、うっかりすれば、それを形而上学へと解消してしまいたくなるのであろうが、武田はそれをしていない。文学が、「問題」をではなく、「人間」を描くものであるとすれば、武田は、「蝮のすえ」において、形而上学の彼方に隠れて見えなくなりがちな「人間」をそのままのかたちで捉えるという困難な作業に、一応は成功しているという評価を私は下したいのである。

さらに、予想のかたちで、私なりの評価を述べれば、武田の持続力の源泉に、このような、問題へのアプローチの姿勢が存在しているようにも思われる。武田の作品には、しばしば結末がなく、問題も放り出されるような形で終っているものが多いが、その一方で、武田は、一つの問題をねばり強く描き続ける作家でもある。そのような武田の持続力の背景には、問題を安易に抽象化しないという姿勢があるのではないだろうか。

以上、「蝮のすえ」に見られる「罪」の問題について考えてみたが、この問題の評価のためには、例えばドストエフスキーの「罪と罰」のような、「罪」を正面から取り上げた作品や、「行為」を問題にした近代作家の作品などとの比較が必要になって来るだろう。私がここで述べた評価にしても、本当のところは、そのような比較があって、初めて検証し得るものであるが、このことについては、別の機会を待って、改めて論じてみたいと考えている。